
小さな恋心

華帆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小さな恋心

【Zコード】

Z9749H

【作者名】

華帆

【あらすじ】

中一のある日の出来事。その日はとても寒い日だった。その日、ある人に助けられ、冷えきった体と心があたたまつた。同時に、小さな恋心に火がついたんだ……。

1：プロローグ（前書き）

初めての小説投稿です！完結するまで頑張りますので、よろしくお願いします。

1：プロローグ

私は、この頃まで恋愛に興味はなかつた。

だけど……ふとしたキッカケで、私の恋心に火がついたんだ……。
冬も近くなつてきて、寒さが私を襲つたあの日。

あの時、私に手を差し伸べてくれた人に……私は恋をした。

一週間前の事。

放課後、図書委員会の集まりで、帰るのが遅くなつた私は、急いで階段を下つていた。

一年生の教室は四階。

四階の、私のクラス　　一年二組で集まりをしていた。

この日は何故か、とても寒い日で足がフラフラしてしまった程度だった。外に出るともつと寒くて、手に息をはきながら歩いていた。

時刻は六時。

もう部活が終わる時間だ。

みんなさつさと帰つてしまつたのが、校庭には誰もいなかつた。

強い風が吹き、私は座り込んでしまい、立てなくなつていた。

五分ぐらい経つた頃、私の目の前に、誰かが手を差し伸べてくれた。手をつかみ、ゆっくり立ち上がりながら顔を見た。

私と同じで、背は高くもないけど低くもない男子だった。

「あっ、ありがとうございます。」

小さな声で私は言った。

見慣れない顔だし、一年生ではないだろう。

三年生は部活を引退してゐるから、こんな時間まで残らない。
だから一年生だろう。

「どういたしまして。家まで一人で帰れる?」

「はい……。多分大丈夫です……。」

そう言うと私はペコっとお辞儀をして、手を離し、その場から走り去ってしまった。

家に帰つたら、バックに付けておいたイルカのキー ホルダーがなかつたので落としてしまつたんだろう。

その日から私は……その人を目で追うようになつた。

そして、その日に私の……恋心に火がついた。

1：プロローグ（後書き）

良ければ御感想、 お願い致します！

私の名前は、
神崎由芽

中学生

「もおーっ！冬香ひやんつたら何で起いしてくれなかつたのー？」

「曲茅の事なんか一いも起
この子の名前は、さわのふみか沢野冬香

和の二年上

珍しい時は、冬一番忙いの西藏が古くなってしまった

たん
だ。

「由芽、私もう行くからね！」

ノタシ

フソクハラニ波モジババフソモ

タンスから制服をだし、ホタンをしながら、冬香が作ってくれた朝ご飯のパンを口に押し込む。

お母さんは朝早くから仕事だし お父さんも仕事

バツカの母に教説書を二冊もひめ

段を下る。

顔を大急ぎで洗い、洗面所から出て、ようやく玄関に行く。

—あー！そ、いえは今日英語の辞書必要なんだあ…ハックに入れて

なし……！」

まつ、一つか！

靴を適当に履き、急いで家を出た。

現在の時刻八時十五分。

朝休みは八時三十分に終わる。

間に合ひうー。そう思つた由芽は、体育祭で走つた時よりもはやく走つた。

ガラガラガラ！

時刻は八時二十六分！

間に合つたあ！

「おはよおー由芽ーすぐ席についちゃいなー！」

「あつ……おふあ……よおーつ……ま……いー……」

由芽は、必死に息をしながら席についた。

今のは、吉田舞

私の親友！

ガラガラ！

「おはよウジヤコーます！口直ー号令をー！」

一年二組の担任の井上先生が入つてきた。歳は四十ぐらいの男性で、格好いいわけではない。

「起立！礼！着席」

日直の号令が終わると、先生は何故かコクコクとうなずいて、真剣な顔になつた。

「ええーーと……近頃、不審者がこの辺で出でてゐるらしいので、皆さん気をつけてくださいねー」

「ハーイ」

みんな適当に返事をして、次の時間の英語の用意をした。

そういうえば辞書……。

隣の席の佐藤雄麻君は私が忘れ物をすると、いつもバカにしてくる。バカだからしようがないんだけど……。だから佐藤君には借りたくないし、言いたくないなあ……。

「よし！朝の会は終わりー！口直号令ー！」

「起立！礼！着席！」

号令が終わつたと同時に、みんな自由行動をとつた。

朝の会が終わると、十分間の休憩時間に入る。

「やべー……美術の教科書忘れたあ……」

廊下から聞き覚えのある声が聞こえた。

振り返ると、この前助けてくれた先輩だつた。

お礼言つてこなきや……！

由芽は、椅子から立ち上がり、廊下まで来た。

「あ……のっ！」

大きい声を出して言つたら、廊下にいる人全員が振り向いた。
み……みんなの視線が痛い。

「「」の前、助けてもらつた者ですっつ！」

そう言つと先輩は、ああ。と言つてにっこり笑顔をつくつてくれた。
「だつだから……そのおー……ありがとうございます！」……え
えとつ……それで、何かしてほしい事とかあ……ありますか？」
途切れ途切れの言葉でそつと言つた。

「うーん……特にないけど。……あつ、美術の教科書かして」

「今……ですか？」

「うん」

由芽は、自分のバックに間違えて入れてしまつた美術の教科書を先輩に渡し、ぺこりとお辞儀した。

「ありがとう！またあとで教室に寄るね！」

一年生の教室は三階。

美術室は四階だからここまで来たんだろう。

「おー？良かつたじやん佑介！」

と、いきなり女子の先輩が入つてきて、私の肩にポンと手をおいた。
「ありがとちゃん」とじりでさつき、オロオロしてたけど……なん
かお困り？」

女子の先輩が綺麗で肩までつく高さの栗色の髪を触りながら、私に
問い合わせてきた。

私の髪なんて、茶色がちょっと混ざった短い黒い髪の毛を二つに結んでいて地味なのに……羨ましい。

「あ……えつと、英語の辞書忘れちゃって……」

「あつ、そうなの？俺のかそつか？」「

「えつ……でも……」

と、オロオロしている間に、先輩は辞書を取りに行ってしまった。すると、さつきの女子の先輩が、肩に手をおいてきた。

「私の名前、伊藤凜いとうりんって言うの！貴方は？」

「私は、神崎由芽です。」

「そつかあー！じゃあ由芽子～コロシク」「

「由芽子……？」

「ん？気に入らない？」

「いえ……」

そう言つてる間に先輩が戻つて來た。

「どうぞ！じゃ、俺行くわ！凜も行くぞ！」

「ハーサイ。またねー由芽子！」

「あーはい！」

そう言つて先輩は行つてしまつたので、私も自分の席に戻つた。そしたら……。

佐藤雄麻がこつちをジロジロ見てている。

「なに？」

私が言うと、佐藤君はにーっと笑つた。

「今の先輩、好きなの？」

と聞いてきた。

私は顔が真つ赤になるのを感じて、うつむいた。

「ふ〜〜〜ん」

と、佐藤君は言つた。

「でも、あの先輩つて伊藤先輩と付き合つてゐるんだぜ？」

え？

3：一安心

それからの授業には全然力が入らなかつた。

あの一人……付き合つてるんだ……。

まあ、私みたいな子相手にされないのは当たり前だけど。

キーンコーンカーンコーン

四時間目終わりを告げるチャイムが鳴つた。

「起立！礼！着席！」

日直の挨拶が終わつたと同時に、みんな動きだした。

そういえば辞書返してない！

どーしよお……。

何組かもわかんないし……。

名前もわかんないし……！

「由芽子……！ちわーつす

あつ！伊藤先輩だ！

「先輩！こんにちわ！あの……さつきの男子の先輩の名前つてわからりますか？」

「あー！にいがきゅうすけ新垣佑介ね！」

あつ……。

そういうえばあの時、佑介つて言つてたもんね……！

伊藤先輩に聞きたいなあ……付き合つてているのか……！

「ありがとうございます！あの……伊藤先輩つて彼氏いますか？」

「彼氏ー？いない、いない。好きな人はいんだけど……。そいつ彼女いるし」

「……？」

あれ？

付き合つてないの？！

いよつしやああああつ！

「私！先輩の恋、応援します！」

そう言つと凛は、由芽の手を握り、顔を輝かせた。

「あつりがちよーーーー！じゃあ、私も由芽子が好きな人いるんだつたら相談のる！いの？」

「……あ、はー。気になつてる人なら……。」

「マジー！？じゃあ今日携帯にメールするから、アド教えてー！」

「はーいっつー！」

由芽は、ポケットに入れておいた小さじ紙に、アドレスを書いて渡した。

「あつー！辞書返しといてあげるわー！じゃあねーん！」

凛は、辞書を掴み取り、そのまま走り去つてしまつた。

由芽は、スキップしながら給食の準備に入つた。

4・不安倍増

「はあ～～疲れた！」

自分の部屋に着くと、ため息をつくと同時にバックを投げた。ゴロンとベットに転がり、一息ついた。

付き合つてなくて良かつたあ……。

砂時計を見ながら由芽は思った。

ブーブー

携帯が鳴つていて。

マナー モードにしてあるので、音は鳴らない。

バイブ音である。

携帯を持ち、携帯を開くと、新着メール一件と出ていた。

件名が凛で～す！と書いてあるから、伊藤先輩だとすぐわかった。

本文は

ヤツホー

凛で～いーす！由芽子だよねえーん？

そうそう！

あたしの好きな人は～！

その次の文に目を凝つた。

佑介なんだ！～！

そこで文は終わつていて。

伊藤先輩は……新垣先輩の事……！

応援できないよお……～！

ポタポタと涙が、携帯の画面に落ちていく。

視界も薄れてきた。

顔……洗おう……。

洗面所に行き、自分専用のタオルを棚から取り出した。
ピシャピシャー！

水を顔に押しつけるよつつけ、タオルで顔を「ゴシゴシ拭いた。
勝ち目ないよお……！」

そんな思いで胸がいっぱいだった。

数分経ち、自分の部屋に戻り、メールの返信をした。

こんばんわ

由芽です。

そななんですかあー？

頑張つてください

そう送つた。

携帯を閉じ、自分の部屋のベランダに出た。

もつ冬に近づいてきて、外は暗い。

だけど、風が気持ち良い。

悲しみでうまつっていた心を落ち着かせてくれた。

「ありがとう……！」

そう呟いて、外を見渡していると 信じられない光景。

信じたくない光景が目に飛び込んできた。

冬香と佑介が、手をつないで歩いていた。

5・止められない想い

「たつだいま～」

冬香ちゃんが、機嫌の良い声をだして、私の部屋にノックも無しで入ってきた。

「おかえりなさい。機嫌良いね？ どうしたの？」

手をつないだ現場を見てから、完全に頭がパニックになっていたけど、伊藤先輩とのメールのやりとりで、少し落ち着いた。伊藤先輩は、お風呂に入つてくる。と行つてしまつたし、今まで読書をしていた。

「エへへ わかるー？ 実はあ…… 彼氏に指輪もらつたんだあ おもちゃのだけど！」

ジャーン！ と言つて、冬香ちゃんは指輪を見せ付けた。

冬香ちゃんの大好きな色 薄いピンク色の指輪だ。

「冬香ちゃん、 彼氏いたんだ？ 誰ー？」

それとなく聞くと、冬香ちゃんは目を輝かせて言つた。

「新垣佑介つて言つの！ 私から告白したひ、すべてOKしてくれたの

！ ～ ～ ふふふふ

うぞこくらこ ～ ～ 笑顔で言つた。
やつぱり……付けてるんだ……。

。

「それでね！ 明日学校休みじゃん？ 佑介が家に遊びにくるのー。」

「…………え？」

「だから由芽！ 邪魔しないでよねー！」

冬香ちゃんは、そう言つて部屋を出でていった。

明日……来るんだ……？

そつか……。

ピンポーン！

お匂い飯を、台所で片付けていると、インター ホンが鳴った。
冬香ちゃんは、慌ただしく玄関に行つた。

玄関のドアが開く音がする。

なんだか話し声がする。

声がどんどん近づいてくる。

台所とリビングはつながつていてる。

だから、リビングに来るつもりなんだろう。

ガチャ

リビングのドアが開いた。

「おおー、綺麗だなあ。……あれ？ 神崎さん？」

「あ……こんにちは。『じゆつくりして行つて下さいね』

新垣先輩と冬香ちゃんが並んでいるのを、見ていたくない……

「あつ！ 待つて由芽！ お茶とお菓子出してくれる？」

冬香ちゃんがそう言つながら……出すしかないよね……。

テンション低めでお茶を出した。

お菓子あつたつけ？

「冬香の部屋は綺麗なのか？」

「佑介のために綺麗にしたわよー！」

リビングで楽しそうに話す声が聞こえる。

羨ましきる……！

あれ？ ここにクッキー置いておいたのに……ない！
どうしましょ……。

お菓子……待つてるよね？

じゃあ、作っちゃおうかな？ クッキー。

アピールできるチャンスだし！

「あつやつや……」

ちょっと固いし焦げてるし！

星やハートの形のクッキーを作った。

食べれるけど……大丈夫かな？作りすぎちゃつたし！

卷之三

「ちー、あつがとー由芽ー！」

「お、いいじゃんだね、ありがとうございます！」

やば……涙できそう。

「うん！ 美味しい！」

新疆先輩がおひきりでなくしてゐる

泣一せひ一ノア。

「あ……部屋に戻るね！一人とも」ゆづくり！

あれでて結局

私

諦められないよ.....！

6・小さな火花

ブーブー

携帯が鳴つてゐる……。

メールかな？

携帯をゆっくり開いて見ると、伊藤先輩からのメールだった。

こんちわー

今さあー、暇だから由芽子の家に来ちゃつたあー！

えー！

私は、部屋から飛び出し、玄関まで走り、荒い息を整えてドアを開けた。

「ヤツホー」

手をひらひら振つて、玄関に入つてきた。

「こんちは。じゃあ……私の部屋一階ですので、案内しますつてえ！」

言い終わらないうちに、伊藤先輩が、リビングに向かつている。新垣先輩と会わせたらやばいよね？

冬香ちゃんもいるし。

「先輩！こつちですよーー？」

「えー？だつてリビングでくつろぎたいしー」

ガチャ

リビングのドアを開けてしまつた！

「ヤツホー 佑介に……ドロボー猫」

伊藤先輩が満面の笑みで言つた。

「誰がドロボー猫ですってえーーー？」

冬香ちゃんが、伊藤先輩に怒鳴り、私の方を睨んだ。

「由芽つづー邪魔しないでつて言つたわよねーー?」

「いーごめんなさい……」

私はペコペコ頭を下げた。

伊藤先輩は、表情を変えない。

一体、どういう事なの?

新垣先輩は固まつてゐるし。

「そのままの意味よー?ドロボー猫さん あつーそれとおー、邪魔をしたのは由芽子じやないしー、あたしの事だつて邪魔したんだからさあ……人の事言えないつしょおー?」

「ーーー」

伊藤先輩は、私の方を向いてピースした。

冬香ちゃんは、顔を真つ赤にして反論した。

「つづ、つむれーーーいいから帰つてー迷惑だわー」

「いーは由芽子の家でしょ?あなたに帰つてつて言われてもねえーな……何でこんなに仲が悪いのー?」

「アハハー！」めんね由芽子「

「いえ……」

あの後、冬香ちゃんは手まで出さうとしたし、私が思いつきり怒鳴りつけたらみんな黙った。

これ以上うるさくされたら迷惑だし、伊藤先輩を私の部屋に連れていった。

「そんな怒らないでよおーー！あつー！そーそー。由芽子、アンタ佑介の事好きなの？」

「……え？」

「うそ？なんでそんな事？」

「何ですか……？」

「んー？いやあ……何となく……。で？ビーなの？」

伊藤先輩が真剣な表情で私を見る。

「…………そ、そんなわけないですよおー？アハハー……」「そ？わかった」

伊藤先輩はすぐに満面の笑みを浮かべた。

「じゃあ……由芽子の言葉、信じるから」

伊藤先輩はそう言つてベットに寝転んだ。

「…………あたしああー佑介と幼なじみでさあー……。小学生の頃から好きだったんだあー……。中一の時、佑介に告つたらOKしてくれたんだあ……。すつごい嬉しかった」

伊藤先輩は弱々しい声で言つた。

「付き合つてて一ヶ月くらい経つた時に、年下の子に告られたんだあー……。その時、仲が良かつた冬香に相談したの。相談した次の日、私が年下の子を口説いたつて噂が流れててさあー……。そしたら佑介に、友達のままでいようつて言われちゃつてさ……。そしたら冬香と佑介が付き合う事になつてたんだあ……」

「え……」

「冬香むち、佑介の事が好きだつたらしい。噂を流したのも冬香らしいんだけど……。だから、ドロボー猫つて言つてゐんだあ……」

「……」

「アハハ、『ごめん』『ごめん』。空氣重くなつちやつたねえー！」

伊藤先輩は手をひらひら振つて笑つていた。

つくり笑いなのがすぐわかつた。

「先輩は……噂の事、否定しなかつたんですか？」

「否定……できなかつた。……佑介が、噂を信じたつて事にショック受けたわ……」

伊藤先輩は、下を向いてしまつた。

そんな重い空氣を消し去るよう、伊藤先輩は立ち上がつた。

「帰るわー！暗くなつてきたしーー！じやつー！」

伊藤先輩は、そのまま部屋を出でていつてしまつた。

「おはよー由芽！…なんか元気ないね？」

教室に入ると、舞が飛び付いてきた。

目をクリクリさせていて可愛い。

「そう？疲れてるだけだよ、多分。」

そう答えると、舞は安心した様子で離れた。

「なら良いけど。もうすぐチャイムも鳴るし…また後でねー」

舞はそう言って席についた。

私も自分の席についた。

教科書やノートを引き出しに入れ、先生が来るのを待つた。

「おー、神崎」

隣の席の佐藤に声を掛けられ、私は適当に返事をした。

「話あるから放課後、教室に残れ」

「え……うん」

私の返事と同時に、先生が教室に入ってきた。

話つてなんだろ？

伊藤先輩の事……かな？

休み時間になり、その事を舞に話すと、一瞬黙り込んだけど、すぐに顔を輝かせた。

「告白じゃん！？」

「ばつ！ばか！んなわけないでしょ！？」

私は、軽く舞の背中を叩き、下を向いた。

「いやあー？わかんないかもよおー？楽しみー」

面白がってるし……まあ良いけど。

でも、佐藤のわつきの顔を見たら、告白かも…って思っちゃうよね？なんかどきどきしてきたあ！

「起立！礼！ わよつなら！」

号令が終わると、皆血をまぎまな行動をとつた。

舞はテニス部だ。

これから練習もあるからその準備をしている。

私は部活に入つていなかから、約束通り、教室にいる事にした。

「由芽ー また明日ねー」

そう言つて教室を出ていった。

それから五分が経つた頃、教室には私と佐藤が残つていた。
お互ひ黙つていた。

そんな空氣を振り払うように、佐藤が話を切り出した。

「あのわ…… 神崎は新垣先輩の事が好きなんだろ？」

「う…… うん」

なんかドキドキする。

「伊藤先輩もさ、新垣先輩の事…好きなの知つてる？」

「し…… 知つてるよ？」

ぎこちない返事を返す。

「実はさ…… 僕、伊藤先輩…………… 凜の事が好きなんだ」

「ふーん…… つて…ええ！？」

じゃあ、伊藤先輩に告白した年下の人つて佐藤！？

「俺と凛はさ、結構仲良かつたんだ。そしたら、次第に凛に惹かれ
ていつてさ……」

「うなんだ……」

「だからさ！ 僕はお前に協力するから……………」

「私もアンタに協力しろ…………… つて事？」

「うん……」

「でも、そしたら私…… 冬香けやんにも、伊藤先輩にも恨まれそり……」

それに…… 伊藤先輩にこの前、新垣先輩の事、好きじゃないって言

つちやつたし。

「頼む！！」

佐藤は土下座してきた。

そこまでする……？

なんか可哀相になつてきたなあ……。

「……わかつた！協力する！それで良い？」

「あつありがとう！！」

佐藤は体を起こして、私の手を両手で掴んできた。

「ちよつ！何すんのよ！？」

「あ……」

「あ……ゴメン」

でも、佐藤つたらちよつと可愛いかもつて思った。

「ふうーん…… そうなんだー」

佐藤に、新垣先輩を好きになつた理由や、伊藤先輩と冬香ちゃんの関係を簡単に説明した。

「佐藤は、ふうー。と一息ついて、俺部活行くわ！」

え? 話入ってんの?」

左藤はその英語話に向かつて

新垣先輩は部活入ってるのかな?

卷之三

教室から出て、階段を静かに降りた。

夕方の図書室は人があまりいなくて好き。

誰もいないかなー?

勝手に納得して、本を探しあじめた。

た。

え？ おー！

卷之三

「……………」

エキエキして夢な言葉はなにかやうになし。

静まれ 静まれ 静まれ

「大丈夫？顔真つ赤だよ？」

新垣先輩が顔を覗き込んできた。

「は……はいっ！大丈夫です！」

「そう？なら良かつた」

新垣先輩は、教科書とノートを取り出し、勉強をはじめた。

「先輩は……よくここに来るんですか？」

新垣先輩は顔をあげて頷いた。

「毎日来るよ。ここだと落ち着いて勉強できるし、夕方の図書室は好きなんだ」

新垣先輩はそう言って微笑んだ。

素敵！……！

「私も……誰もいない夕方の図書室が好きで、よく来るんですよ」

「そうなの？気が合うね……。神崎さんも一緒に勉強する？」

「え。良いんですか？」

もちろん！という風に頷いてくれた。

私も数学の教科書とノートを取り出した。
いつの間にか、胸のドキドキが消えていた。

10・行かないで…（前書き）

更新遅れてしましました、
すみません、

10・行かないで…

それから私は、毎日図書室に通っていた。

近くにいるだけでもドキドキするのに、お話までできちゃつたら…
死んでも良いぐらい…！

そんなルンルン気分で、今日も図書室に行つた。

ガラガラガラ

中には誰もいなかつた。

いつもなら、私より先に来ているはずなのに…。

とりあえず、私は数学の教科書とノートに、筆記用具を出した。

今日の宿題を進めていく。

あつ、ここわかんない…。

先輩が来たら教えてもらおつ

ガラガラガラ

「！」

新垣先輩が来たと思い、椅子から立ち上がると、扉から出てきたのは…

佐藤だつた。

「佑介……ちょっと良い？」

伊藤凜が、真剣な表情で佑介に言つた。

帰りの会が終わり、みんな色々な行動をとつていた。

ある人は部活の準備。

ある人は委員会の準備。

ある人は帰る準備。

など、様々だ。

その中で凜は、強引に、佑介を屋上まで連れていつた。

「話つてなんだよ……」

凛のあまりの真剣な表情に、驚きながら話を切り出した。

「…………」

凛は黙つていた。

十分経つても話しださない。

佑介は、ハーアーと言つて、屋上から出よつとした。

その時、

「どこ行くの？」

凛の冷えきつた声が聞こえた。

佑介は、凛に向き直つた。

「関係ない」

「由芽子の所？」

「お前に言つ筋合いはない」

「由芽子と毎日会つてこるそつだなび、何してるの？」

「何でも良いだら」

「彼女の事、放つておいて良いの？」

「…………」

佑介は、凛に背を向け、屋上から出よつとした。

「待ちなさいよ」

凛の声があがつている。

佑介は無視して出ようとした。

その時、凛に思いつきり腕を捕まれ、強引に唇を重ねられた。

「なつ！何すんだあほつ！！」

佑介は強引に体を離した。

凛はそのまま下を向いていた。

「とにかく……俺、もう行くから……」

「まつ！待つてよ！」

「なんだよ！……」

「図書室には……行っちゃだめ……！……」

凛は小さいけれど迫力のある声で言つた。

「なん……で」

「由芽子に告白したい人がいるから……！……だから一人にさせて

あげて……！……」

凛はそう言つて、佑介の腕を掴んだ。

佑介は、抵抗する事ができなかつた。

「どうして

「別に……。ここに来いつて頼まれたんだよ」

佐藤はそう言つて、私の真つ正面に座つた。

「お前こそ、何してんの？」

「見てわかんない？お勉強中！」

「ふうん……」

興味のないような返事を返してきた。

それから、少し時間が経つた頃、佐藤が口を開いた。

「……新垣先輩と会つてたんじゃないのか？」

12・それぞれの想い

佑介は階段をゆっくり下つて行つた。

あれから凛に引き止められたが、帰る。と言つて抜け出した。
教室に忘れてしまったバックを手に取り、廊下を歩いた。

佑介が向かつた先は、図書室だつた。

ドアノブに手をかけ、入ろうとした瞬間、

「 佑介？」

後ろから、聞き覚えのある声がした。

振り向くと、冬香が不思議そうな顔をしていた。
凛じゃなかつた事に安心して、ほつとした。

「何してるの？」

冬香は首を傾げて聞いてくる。

その仕草に、つい顔が赤くなつてしまい、顔を手で隠しながら答えた。

「いや……それより、一緒に帰ろう?」

「うん……いいけど……どうして顔、隠してるの?」

悪戯っぽい声で聞いてくるのに、また顔を赤くした。

「わかつたあー 照れてるんでしょー? 可愛いー」

「う……うるさいーとにかく帰るぞー!」

冬香はハイハイと言つて佑介の横に立つた。

「……そんなの、お前が可愛いからに決まつてるだろ……」

小声で言つと、冬香は照れた顔を隠さず、

「ありがとう」

と、最高の笑みで言つた。

二人は手をつなぎ、階段を下つて行つた。

「 ！」

見てしまった。

見たくない光景を、見てしまった。
早く階段を下ろう。

そう思つてゐるのに、凛の足は動かない。
嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ！！！

雄麻が冬香と仲良く話しているの……見たくなかつた。
だから、早く階段を下ろうつて……！！
なのに、足は動かない。

呼吸が乱れてくるのを感じる。

手をつないで、幸せそうに歩く一人なんか見たくない！！
咄嗟に、凛は走りだした。

階段を昇つて昇つて……一年生の教室に逃げ込んだ。
何組かはわからない。

だけど、そんなのどうでもいい。
体の震えが止まらない！

止まれ止まれ止まれ！！！

そう願いながら凛は、ぽたぽたを涙を流した。

「 凜？」

誰かの声が聞こえた。

頭がぼーっとして、よくわからない。

顔をあげると、雄麻に似た少年が、手を差し伸べていた。

「 え？」

何で、そんな事を佐藤が知つてゐるの？

その気持ちを悟つたのか、佐藤は静かに口を開いた。
「 凜から聞いた。 いや、凛から俺が聞き出しだんだ」

「ど、どうこの事……？」

私はおぞるおぞる聞くと、

「 好きだから…… 神崎の事」

佐藤がそう言ったと同時に、図書室の扉の、汚れた窓から、新垣先輩の姿があった。

来てくれた……！？

私は、今の状況を忘れて、ドアを開けた。

そこで見たのは 新垣先輩と冬香ちゃんが、手をつないで階段を下る所。

わかつてはいた。

二人は付き合ってるんだから……！

だけど

悲しみが怒りが混じり、私はあてもなく走りだした。

「どうして……雄麻が？」

凛は立ち上がり、自分より少し背の高い雄麻を見た。

「いや……神崎の事を追いかけてたら……凛がいたからさ」

雄麻は、これまでつたことをゆっくり話した。

凛は何度も頷き、最後はため息をもらした。

「やっぱり、好きなんだね……佑介の事」

凛は、雄麻に背をむけた。

凛の目には、校庭で野球ボールを拾う姿や、サーブミスして注意されているテニス部の子がうつっていた。

しばらく一人は黙っていた。

その沈黙をやぶるように、凛は振り返り、作り笑いを浮かべた。

「よしつ！帰るぞ！雄麻！」

雄麻の背中を軽く叩いて、凛は歩きだした。

雄麻は、凛の淋しそうな背中に、何もする事ができないのだろうか、と、心の中で何度も、自問自答を繰り返していた。

雄麻は、凛の肩に手を置き、小さな声でありがとう、と、呟いた。

凛は、振り返り、何が？と首を傾げた。

「俺に、告白できるように新垣先輩の事を引き止めてくれたし……俺を、勇気づけてくれたから」

雄麻はほほ笑み、凛も自然とほほえんだ。

「ハア……ハア」

ここはどこだらうと思いつつ、私は、呼吸を整えた。

無意識に走っていた為、ここがどこなのかわからなくなっていた。

あまり、人通りの少ない道路で、ボロボロの家や、荒らされたのか

よくわからない公園しかなかつた。

こんな場所來たことがなく、どうしようもない気持ちになつた。

携帯は家にある。

連絡するための手段がない。

仕方なく、荒らされたのかよくわからない公園のベンチに座り、頭を抱えた。

辺りはもう暗い。

誰も人がいないし、歩く力も残つてない。

どうしようかな、と思っていると、

「由芽……!?」

遠くの方から、そんな声が聞こえた。

周りに目をやつても、姿が見当たらない。

「ゆーめ!」

視界にいきなり、舞が入つてきた。

「ほんとにありがとうございましたー舞ー」
どういたしまして、と言つて、舞は靴を脱ぎ、廊下を歩きだした。
私も舞に続き、歩き始めた。

ここは舞のマンション。

たまたま舞が、犬の散歩の途中に私を見つけてくれたおかげで、私はとても救われた感じになつた。

「ただいまー！お母ちゃん！」

舞は、リビングのドアを開けて、そのままソファに転がるよつて座つた。

「おかえりなさい。あら？・由芽ちゃんいらっしゃい。久しうりねー！小学校以来かしらあ？」

舞のお母さんがキッチンから顔を出し、私を見て、にっこりほほ笑みながら手を降つてくれた。

私は軽く頭を下げ、ゆっくり顔をあげた。

「お邪魔します。本当に久しうりですねー」

そう言いながら、私は近くにあつた椅子に腰をおろした。

そうねー、と言しながら、舞のお母さんはキッチンに戻つた。

舞も、そういうえばそうね、と言ひ、冷蔵庫を開け、顔を近付けていた。

舞の愛犬チエリーも、ワン！と吠えて、私の周りもぐるぐる回つた。小学生の頃は、よく来ていたけれど、ここ最近、あまり遊びに来なかつた為、舞達も嬉しそうだ。

「あーねー由芽ー！今日泊まつていきなよー明日休みだし」
舞は、冷蔵庫から取り出したオレンジジュースを、コップに注ぎながら、明るい声で言つた。

舞のお母さんも賛成の声をあげてくれた。
チエリーも嬉しそうにワンワンなつている。

私も、舞の家に泊まりたいなあ、と思つてはいたし、お言葉に甘えようと思つた。

「じゃあ……泊まっちゃおつかな」

私がほつと呟くと同時に、舞のお母さんが、夕食の、スペゲッティーミートソースと、コーンスープに、美味しいそうなマカロニサラダを出してくれた。

「よしつ！決まり！じゃあ食べよつか、由芽？」

「うん！ありがとう」

そう言つて、みんなでいただきますをして、食べ始めた。

舞のお母さんが作る料理も久しぶりだなあと想いながら、コーンスープを口に運んだ。

「じゃあ、由芽！明日が、一緒に出かけない？新しくできた可愛いお店があるらしいから。」

舞は、スペゲッティーミートソースを、口に運びながら言つた。

「口にものを入れながら話さないの！」

舞のお母さんが困った顔をして言つては、口を出しておじけている姿にまたまた困る舞のお母さん。

これを見るのも久しぶりだなあ……。

何もかも懐かしく感じながら、マカロニサラダに手をのばした。

「うん、いいよ 私も行ってみたいし」

舞は、コーンスープを飲みながら微笑んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9749h/>

小さな恋心

2010年10月14日13時39分発行